

特色ある共同利用・共同研究拠点 中間評価結果

大学名	法政大学	研究分野	人文学（芸術学・芸術一般）
拠点名	能楽の国際・学際的研究拠点		
学長名	廣瀬 克哉		
拠点代表者	山中 玲子		

1. 拠点の概要 ※中間評価報告書より転記

[拠点の当初目的]

能楽およびその周辺に関する豊富な所蔵資料を公開し、幅広い分野の研究に役立てるとともに、国際的・学際的な研究ネットワークの拡大によって、総合芸術としての能楽に対応した多様な視点による研究の進展や、新たな研究領域の創造をめざす。

[拠点における目的の達成状況及び成果]

【所蔵資料・研究成果の公開】

能楽研究所が所蔵する能楽資料を広く公開し、学際・国際研究への利用を促進するため、貴重資料のデジタルアーカイブ化を積極的に進めるとともに、これまで活字化がなされておらず、ほとんど利用されてこなかった重要資料の翻刻公開を行った。

前半三年間で新たに追加したデジタルアーカイブ資料は、『名女川家狂言伝書』9冊（長らく行方不明で、平成30（2018）年に再発見され、能楽研究所の所蔵となった）をはじめ、『名女川家番組留帳』12冊、『大蔵虎清間風流伝書』『和泉流間習分』等の狂言関係資料、近代能楽史関係資料、伊達家旧蔵能楽資料など、全部で220点以上（数十冊まとまっても1点と数える）に達している。中でも令和元（2019）年に公開した「伊達家旧蔵能楽資料デジタルアーカイブ」は、伊達家が所蔵していた能楽資料に関する唯一のアーカイブとして、研究上きわめて重要度の高いものである。

また、翻刻による研究成果の公開にも精力的に取り組んだ。令和2（2020）年度刊の『近世諸藩能役者由緒書集成（中）』、令和3（2021）年度刊の『同（下）』は、全国各地の文書館・博物館等に散在する諸藩お抱えの能役者の由緒書を網羅的に集成・翻刻した初めての企画で、弘前藩から鹿児島藩にいたる58藩の資料を収め、令和元（2019）年刊行の上巻と合わせ、総ページ数は1460ページにも上る。この他、前出の『名女川家狂言伝書』については、公募型共同研究の一環として3冊の狂言台本を、能楽研究所所員4名の共同研究として『名女川六右衛門手記』1冊を翻刻し、紀要『能楽研究』に掲載した。

同じく公募型共同研究による成果として、間狂言台本『あい之本』『鷺流間狂言付』『鷺流狂言型附遺形書』『和泉流間狂言伝書』『和泉流間習分』以上13冊の資料の翻刻、室町中後期の小鼓伝書11点の翻刻が挙げられ、前者の一部は紀要『能楽研究』及び拠点ウェブサイト、後者は刊行物『宮増小鼓伝書の資料と研究』（重田みち編、能楽研究所、2021年）に公開済である。

以上は能楽研究のみならず、日本文化研究の重要な基盤となるものであり、本拠点の目的である所蔵資料の公開と研究への利用促進は着実に進んでいると言えよう。こうして集積された膨大な翻刻文字データを、日本語学をはじめとする周辺領域の研究に活用するプロジェクトも現在進行中である（後述）。

【学際的な研究ネットワークの拡大・新たな研究領域の創造】

従来の能楽研究とはまったく関わりのなかった新領域や、あまり交渉のなかった近接領域との共同研究が多く行われた。

音響情報処理の研究者による謡の節やなびきの分析や、能が謡われる環境（能楽堂という場所や能面の着装など）が音質感に与える影響の解明など、理系の研究の場合は、本拠点では能楽に関する基礎資料や知見の提供、研究に理解があり技術も確かな演者の紹介、実験にふさわしい環境の確保などの役割を果たすことになる。情報経営学の視点に立った、能役者の顧客サービスや発信の研究については、コロナ禍の中で当初の計画通りには研究が進まなかったが、まさにそのコロナ感染拡大という非常事態に直面して能役者の意識が大きく変わった面があり、新たに研究計画を練り直して、より積極的に進めていくべき分野

と認識している。

こうした「異分野」との共同研究のほか、外から見れば同じ人文系の、文学・芸能・言語・思想等、近接領域の研究者との積極的な研究交流により、新しい研究方法を開拓し、「能楽研究」自体を大きくしていくことにも力を入れてきた。別紙3の一覧ではわかりにくいこれらの成果について少し詳しく述べる。

- ①共同研究により人文科学としてより広い領域が活性化され、人材育成にも繋がっている例として、慶應義塾大学斯道文庫准教授（2019～21年度当時）の高橋悠介を中心とした共同研究を挙げたい。神道や仏教や中世の歴史・文芸などを専門とする若手研究者が集まり能の宗教的背景を広く研究しながら、能作品の中に引かれている仏教関係語句のデータベースを作成してきた。能の「文学的素材」については詳細な研究の蓄積があるのに対し、宗教関係の言葉の分析は従来ほとんど手つかずであった。どの出典からどのような表現がどのような意味で引用されているかを一覧するデータベースは、関連領域の研究者からも公開を切望されている（2022年度試験公開を予定）。宗教的な背景、文脈を解明することで能楽論や能作品の解釈が深まると同時に、能楽という芸能を通して中世の宗教の広がり理解することが可能となり、メンバーの若手研究者には相互の研究領域に踏み込んだ新しい研究成果が生まれている。そうした論考16本を集めて『宗教芸能としての能楽』（勉誠出版、2022年1月）が刊行されたほか、共同研究開始以来の5年間で3名の若手研究者が研究機関に専任のポストを得ている。
- ②能楽研究の近接領域として、国語学の研究者が、拠点所蔵の謡伝書を網羅的に調査し、連濁や濁音前鼻音、アクセントなど、中世末期の発音の実態を具体的に示す資料であることを明らかにして、日本語音韻史に様々な新知見をもたらした。さらに、言語情報処理と能楽研究との若手研究者による共同研究も始まっている。現在は、電子テキスト化した能楽伝書のデータを、自然言語解析に広く用いられる形態素解析ソフトウェアMeCab用のUniDic近世語バージョン(国立国語研究所)を用いて解析し、解析を誤っている箇所から、能楽特有の術語・キーワードを抜き出す作業の途中だが、小規模な共同研究では力の及ばない部分があるとの報告を受け、拠点の運営委員会でも検討したうえで、国立国語研究所との正式な共同研究として進めていくことで合意している（協定書の準備中）。

【国際的な研究ネットワークの拡大】

- ①平成25（2013）年の拠点認定以来続けてきた国際共同研究の成果を、第2期の前半3年間でまとめることができた。英語版能楽全書（A Companion to Nō and Kyōgen）の刊行に向けて編集作業を重ね、全900頁の原稿を、2022年2月2日にBrill社に提出した（2022年5月に査読を通過し契約準備中）。
- ②上記①の過程で、Japanese と non-Japanese の能楽研究者間に強固な結びつきが生まれたのは言うまでもないが、同時に海外での本拠点での認知度も高まり、その結果、海外の研究者やドクターコースの大学院生、オーバードクター等から、共同研究や研究指導の要望が増えている。受け入れ承諾書や推薦書を書いただけでなく、実際に来日や共同研究が実現した例は、以下の通りである。
 - ・令和元（2019）年度 ハンブルク大学（ドイツ）アジア・アフリカ研究所日本学科研究員のアイケ・グロスマン(GROSSMANN, Eike Ursula)氏を学術振興会の「外国人招へい研究者」として招聘。拠点の客員研究員として受け入れ、共同研究「能における身体、空間および感情の歴史的・学際的研究」を実施（別紙3参照）。
 - ・令和元（2019）年度 ヴェネツィアカフォスカリ大学（イタリア）日本語日本文学教授のボナヴェントゥーラ・ルペルティ(RUPERTI, Bonaventura)氏を客員研究員として受け入れ、研究のサポートをおこなった。
 - ・令和元（2019）年～令和3（2021）年度 コロンビア大学（米国）大学院博士課程在籍の宮崎真穂氏を客員研究員として受け入れ、博士論文執筆のための指導とサポートをおこなった。
 - ・令和2（2020）年～令和3（2021）年度 テルアビブ大学（イスラエル）の大学院博士課程在籍のアレクサンドラ・ブリキナ(BURYKINA, Alexandra)氏を本学大学院で受け入れ指導。（ただし2022年度はオンラインでの指導）。
 - ・令和3（2021）年度 ナコーン・ラーチャシーマー・ラーチャパット大学（タイ）のザーモンスリヤ、ウィナイ(JAMORNSURIYA Winai)氏を2ヶ月間の客員研究員として受け入れ、同氏の研究サポートをした。
 - ・令和3（2021）年度 トリア大学（ドイツ）のハナ・ミガーヒ(MCGAUGHEY-SLANE, Hanna Sereina)氏を外国人特別研究員として招聘。共同研究「世阿弥伝書のデジタル写本の作成および書承・伝播・受容の分析」を実施（ただしコロナ感染拡大の影響を受け来日は10月。別紙3参照）。

2. 評価結果

(評価区分)

A：拠点としての活動は概ね順調に行われており、関連コミュニティにも貢献していると判断される。

(評価コメント)

本拠点は、能楽等に関する所蔵資料を共同研究に活用し、国際的・学際的な研究ネットワークを拡大させることで、新たな研究領域の創造を目的として拠点活動を実施している。共同利用・共同研究拠点としての活動は概ね順調に行われており、関連コミュニティにも貢献している。

特に、英語版能楽全書の刊行により拠点及び能楽の国際的認知度の向上が見込まれ、海外での能楽研究の活性化や、拠点への外国人研究者の受入が促進されつつある。また、豊富な資料の目録作成・データ化を進め、幅広い分野の研究資源としての提供や、展示等による社会への成果の発信等、従来行われてきた着実な拠点活動に加え、公募型共同研究の申請数も引き続き拡大することが期待されることなど、活発な共同利用・共同研究も行われている。

今後は、大学からの支援の下、外国人研究者の受け入れを更に円滑に行える体制を整備することや、より積極的な公募型研究の募集、能楽の近接分野のみならず他分野との融合研究の活性化などにより、国内外の能楽研究におけるリーダーシップを発揮し、共同利用・共同研究拠点としての国際性、学際性が向上されることが期待される。